

「話す技術・伝える技術」の大切さ

本年度3回目の特別講義を10月30日(金)に理数科2年生で実施しました。課題研究の発表会等、理数科は自分たちの研究内容を他者に伝える場面が多くあります。いくら研究内容を磨いてもそのことが相手に伝わらなければ、発表会の意味がありません。

特別講義では元IBCアナウンサーでNext-stage代表取締役の大高智佳子さんを講師に迎え、ものごとを聴衆にわかりやすく伝えるため、話の内容を整理して聴衆にわかりやすく伝える方法や技術「話す技術・伝える技術」について学びました。詳しくわかりやすい具体例や実演を交えた大高さんの話やゲーム、実習を通して、相手に伝えることのスキルを楽しく学ぶことが出来ました。



Next-stage 大高智佳子先生の講義の様子

話す技術・伝える技術のポイント

- 一、発声・発音の基本は母音。口を縦に開けることを意識する。
- 二、口の開け方で印象が大きく変わる。明るい印象は好印象。
- 三、ポイントを絞る。テンポを意識する。
- 四、せ・め・て・あい・ふく・くせ：背筋・目線・手の位置・足の位置・服装・癖
- 五、理解の必要なところは、特にアイコンタクトを意識する。
- 六、「伝えた」と「伝わった」は違う。
- 七、リハーサルの回数が自信になる。

受講の感想

- ◇ 中間発表のときには、発表内容に変なところはないか、矛盾はないかということにばかり意識が向いていました。今回の講演を聞いて、発表は話し方も含めて評価されるのだと気づかされました。中間発表を振り返ると、視線が定まっていなかったり、声が小さかったり、棒読みだったりして聞き手からは聞きづらかったと思います。先生の話はハキハキとしていて、「間」の取り方も聞きやすく、とても良い見本が見られたので、今後まねしたいです。
- ◇ 中間発表のとき、聞いている人たちに伝えようと努力していましたが、具体的にどのようにすれば良いか、よくわかっていませんでした。今回の講演を聞いてどのようにすれば話したいことが伝わるかということや、どうすれば相手に良い印象を与えられるかということがわかって良かったです。



実習をしながら学ぶ生徒の様子